
5年目のRE:プロジェクト通信

2015年11月11日発行／第2号__仙台市若林区三本塚 再訪



ともに働くことを力に

西大立目祥子

三本塚の大友よし江さんのお宅を訪ねるのは、2011年の10月以来だ。あのときは、津波の爪痕が生々しいこの家に土足で上がったんだっけ。茶の間で、よし江さん、相澤みよ子さん、佐藤かほるさんと向き合い、茹で上がったばかりのスナックエンドウを味わいながら、おだやかな日常の暮らしが戻っていることをかみしめた。

4年前は硬い表情で無言のまま座っていたみよ子さんが、ときおり笑いながら会話に入ってくさるのがうれしい。目に光が宿り表情がやわらかい。かほるさんも手術を受けられたというが、お元気そう。相変わらずパワフルなよし江さんが笑顔でいう。「悲しいことはあったけど、みよ子さんにはひ孫が生まれて家族が増えたし、かほるちゃんとも息子さんが結婚して孫ができたの。かわいいんだよお！」5年という時間は、そんな変化をもたらすものなのだ、と感じ入る。深い傷が、時間の中で少しずつ癒えていく。一方で固く心を閉ざしたままの子どもたちがいることが気がかりと、よし江さんはいうのだけれど。

へばらずにやってこれたのは、震災前から農業を法人化して進めてきた「ゆいファーム」の4軒の結束があったからだ。農地を預かっているという責任から、震災の年の春も田植えをあきらめなかった。

女性たちは「三本塚漬物クラブ」という会をつくって共同で梅干しを漬けて出荷し、姉妹のように何でも相談しあってきた。作業場が津波をかぶり、もはや販売のための仕込みはできなくなっても、自家用の梅干しづくりと味噌づくりのために集う。仲間とともに働くことの心強さが、頑張りの足場。健康で、何でもいいあえる友だちがいれば、何とかなるさ。よし江さんの元気な横顔がそういつている。

よし江さんが台所から梅干しを持ってきた。つややかな紅色の粒。「おいしい！」と声を上げる私たちに、よし江さんが呼応する。「池袋の宮城ふるさとプラザで結構売れたんだよ。あの頃が花だったねえ（笑）」

梅干しは、震災前の記憶をよみがえらせてくれるもの、そして互いの結束を確かめる大切なもの。いつも、心に梅干しを！だ。

もう一度会いに行く。今の言葉を聞くために。